昭和文学交友記

佐々木基一

新潮選書

戦前・戦中・戦後とわたしは動乱の時代を生きてきた。多くの優秀な人材が犠牲になった戦争の時代を生きぬいてこられたのは、今考えてみれば、偶然にすぎなかったようである。わたし自身が時代の荒波のなかを泳いで到達した境地を語ることはできない。だからこの回想では、わたしの中を流れていった時間と、身辺に起こった数々のできごとや友人たちのことを語り、時代の姿をふりかえってみたつもりである。　著者

昭和文学交友記

新潮選書

昭和文学交友記〈新潮選書〉

© kiichi Sasaki. Printed in Japan, 1983

昭和五十八年十二月十五日　印刷
昭和五十八年十二月二十日　発行
定価八五〇円

著者　佐々木基一
発行者　佐藤亮一
印刷　二光印刷株式会社
製本　植木製本株式会社

発行所　東京都新宿区矢来町七一
株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
電話編集部(0303)二六六-五四一一
業務部(〃)二六六-五一一一
振替東京四-八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-600254-X　C0391

昭和文学交友記／目次

1 目覚めの途上で……9
文学とは無縁の環境で　文学上の〝師匠〟たち　映画と文学
寄宿舎での体験　社会主義入門の読書会を始める　プロレタリア文学を耽読　芝居の先生　停学処分を受ける　原民喜と姉の結婚　山口高校左翼組織の潰滅　初めて上京する

2 雑誌『批評』に拠る人々……37
中井正一氏を訪ねる　転向の季節　大学入学と旧友再会　印象薄い同人誌『奔流』　学生消費組合と雑誌『図書評論』　荒正人、久保田正文、小田切秀雄　中国文学研究会を知る　『批評』同人として　二人の友人の死　新劇の周辺　俳誌『草くき』のこと　児玉宗夫の自殺　『南画鑑賞』編集　現代文学研究会と『批評』の解体

3 暗い時代の光と影……69
短命に終わった『文芸学資料月報』　映画評論を書き始める

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

埴谷雄高と『構想』　本多秋五と出会う　平田耕一の遺稿集を編む　文部省映画製作室　ロシア文学に傾倒　日伊協会　羽仁五郎、杉浦明平も執筆した『日伊文化研究』　大井広介氏と『現代文学』　検閲の圧力の下で　検挙、敗戦まで

4　『近代文学』を中心に……99

花巻で迎えた敗戦　『近代文学』創刊事情　「ロオポオの会」と『文学時標』　中野重治、蔵原惟人の柔軟な姿勢　原民喜の原爆小説　新日本文学会創立大会　小林秀雄氏を囲む　マチネ・ポエティック・グループ　戦後文学の第一声　文学者の戦争責任

5　戦後派の系譜……123

阿佐谷界隈の作家たちとの再会　原民喜の上京　中国文学研究会の人々　「政治と文学」論争　石川淳氏を知る　野間宏の「暗い絵」　未知の新人中田耕治　『高原』をめぐる人々　大知識人論　『三田文学』の人たち　中小出版社の盛衰　スロ

ーガン〝共通の広場〟　志賀直哉氏との対談

6　さまざまな文学運動……153

小田切秀雄の脱退　『近代文学』の同人拡大　椎名麟三の抗議　正宗白鳥と伊藤整　文化講演会の流行　梶山季之のこと　花田清輝と真善美社　「夜の会」のこと　戦後文学のピーク　危機の年

7　政治色断ち切れぬ文学……179

コミンフォルム批判と「新日本文学会」　共産党分裂の波紋　「新日本文学会」東京支部　新人発掘　さまざまな死　講演と招待の旅　絵画をめぐって　ネオ・リアリズムの衝撃　新しい世代の擡頭　「真空地帯」をめぐって　花田清輝委員長更迭

8　運動の終焉とメディアの変容……207

「記録芸術の会」発足　『季刊・現代芸術』発刊　活字文化から視聴覚文化へ　醒めたテレビ熱　高度成長のはらむ矛盾に目を

むける契機　近代文学賞　六〇年安保の頃　「蓼科会」の人々
外国文学者たち

9　パリで、レニングラードで……227

再び「新日本文学会」へ　ソヴィエト旅行　レニングラードでの興奮　ドレスデン美術館　パリへ、ギリシャへ　『近代文学』終刊　中ソ論争と新日本文学会　チェコ事件をめぐって
杉並シネクラブのこと　学園紛争とシネクラブ運動

10　静かな時代……253

戦後の仕事を集成　ウィーン滞在　「木六会」始末　二十五年ぶりの創作再開　平野謙・荒正人逝く　「点の会」その他

あとがき……271

昭和文学交友記

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

1　目覚めの途上で

文学とは無縁の環境で

わたしが生まれ育った環境には、文学的な雰囲気など、こればっちもなかった。父は田舎の町の商人であったから、父も母も文学や芸術のことはもちろん、子供の教育についても大して関心をもたなかった。いまの親のように入学試験のことでやきもきするようなことはさっぱりなかった。わたしには、兄が三人、姉が二人いたが、この兄たちも姉たちも、格別文学に興味をもってはいなかった。兄たちはみなスポーツマンで、テニスの選手だった。

ただ、関東大震災前、東京の神田に父の出した酒店の経営に当たっていた長兄は、大へんな芝居気ちがいになっていた。次兄も東京商大（現・一橋大学）へ入ると、熱心な歌舞伎ファンになったらしい。ちょうど、六代目菊五郎と先代吉右衛門のコンビが人気絶頂の頃で、長兄は熱烈な菊五郎ファン、次兄は吉右衛門ファンだった。長兄はたしか『演芸画報』という雑誌を毎号とっていた。舞台写真を沢山載せた雑誌で、幼いわたしは、その雑誌をめくりながら、東京の劇場の舞

台にはるかな思いをはせたものだった。

郷里に近い在所の出身者で、わたしの家とも昵懇だった人に、児童向けの雑誌を出版している人があった。その人の奥さんが、のちに『大阪朝日新聞』の懸賞小説に一等当選した「緑の地平線」という小説で有名になった横山美智子さんだったことを知ったのは、ずっと後になってからであるが、子供の頃、その人の出している雑誌が毎号届けられていたので、童話や童謡なども早くから眼にしていたようである。しかし、何をその雑誌で読んだかはまったく記憶にない。横山美智子さんもおそらく童話を載せていたのだろうが。

そのほかでは、普通の少年の例にもれず『少年倶楽部』や『少年の友』や『日本少年』といった児童雑誌を愛読した。発行日近くなると待ち遠しくてたまらず、まだこないか、まだこないかと本屋へ足を運んだものだ。しかし、いまだにいちばんはっきりと頭に焼きついて残っているのは、本文よりも、むしろその頃——大正の末頃——さかんに活躍していた高畠華宵とか、椛島勝一とかいう画家の挿絵である。竹久夢二ふうの感傷と哀愁をふくんだ高畠華宵の絵は、女性的な優しさへの憧れをわたしの心に植えつけた。後年、イタリア・ルネサンスの画家サンドロ・ボッティチェルリを知ったとき、わたしは思わず、あ、これは高畠華宵みたいだと心の中で呟いたものだった。椛島勝一の方は、硬いペン画で、写真のように精密に対象を再現していた。波を蹴立てて進む軍艦の絵がとくに印象的だった。

島崎藤村の詩や石川啄木の歌も小学生の終わり頃知ったように思うが、どこからそれを知ったのか、はっきりした記憶がない。あるいはすぐ上の姉の女学校の教科書でみたのかもしれない。

広島の中学に入ったのは一九二七年（昭和二年）であるが、いま考えると改造社の現代日本文学全集や新潮社の世界文学全集など、定価一円の大衆版全集であるいわゆる「円本」が出版されは

じめたのも、ちょうどその頃であった。そのためかそれらの「円本」の波が周辺にもおしよせてきて、わたしの眼にふれることになった。姉と従姉たちが回し読みしていた世界文学全集で、わたしは姉たちにすすめられて豊島與志雄訳の「レ・ミゼラブル」を読み、眼を洗われたような気がした。世の中にこんな面白い読みものがあるのかと、びっくり仰天した。「露西亜三人集」で、チェーホフとゴーリキイとゴーゴリの名を知った。ツルゲーネフの「父と子」を読んだのはもう少し後であるが、以来、わたしはロシア文学とフランス文学の愛好者になった。チェーホフの「アニュータ」やゴーゴリの「鼻」は、いまだにはっきりとそれを読んだときの手ごたえを憶えている。

中学に入ると、明治以後の日本文学も次第に眼にふれるようになった。まず国語の教科書で、二葉亭四迷を知った。この筆名が「クタバッテシマヘ」という作者の自嘲に由来するものであることを、国語担当の清水治郎先生に教えられ、なぜかそれが面白くて心に残った。文学は男子一生の事業とするに足りないと言って、文学を放棄したという二葉亭の生き方にも、なぜか心をひかれた。

一九二七年の夏、芥川龍之介が自殺した。そのとき、わたしたちは臨海学校で山口県の室積という町に行っていた。夜の講話の時間に清水先生が昂奮の面持ちで教室に入ってきて、芥川龍之介という天才作家が自殺したと言って、芥川の仕事について話をした。それでわたしも自然に芥川龍之介に関心をもつようになった。わたしが自分で買った最初の現代日本文学全集は、たしか「芥川龍之介集」だった。

しかし、その頃はまだ文学にたいして特別の興味も関心ももたなかった。それなのに、中学二年生のとき、将来何になりたいか、というアンケートの答えに「文学博士」と書いたのは、いか

なる理由によるのか、いまだにわからない。ただ答えにそう書いたことだけは、不思議にはっきりと憶えている。

文学上の〝師匠〟たち

国語教師の清水治郎先生はクラス担任でもあったから、わたしは知らず識らずのうちに、清水先生の影響を心の底深くに受けていたのかもしれない。アンケートに文学博士になりたいと答えを書いたのも、ひょっとしたら清水先生が意識の底にあったのだろう、といまあの頃をかえりみて、ふと思った。

まさかそんな答えを書いたからではあるまいが、それから間もなくして、綴り方の時間に清水先生は前の時間に提出していたわたしの作文を立って読ませた。それは寄宿舎の中でのちょっとしたできごとを書いたもので、どういうわけか書くとき頭の一隅で芥川龍之介か、あるいは当時好きになりかけていた国木田独歩の「忘れえぬ人々」をちょっと意識していたように思う。なかなか面白く書けている、といって清水先生はその作文を褒めてくれた。何かしら漠然と、たんなる作文と小説とのちがいが自分なりにわかるような気がした。

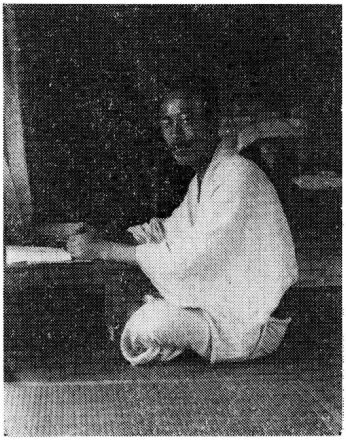
泉鏡花の「高野聖」のモデルが、当時わたしたちの中学の本校である広島高等師範学校の校長だった吉田賢龍氏であることを教わったのも、たしか清水先生からだった。きれいに頭の禿げ上がった、小柄でエネルギッシュな吉田賢龍氏の姿を、「高野聖」の中の旅僧と重ね合わせると、小説がぐんとこちらに近づいてくるような気がした。そんなわけで「高野聖」の印象は生涯消え去らぬものになった。しかし清水先生は日本の自然主義文学はあまり好まないらしく、文学史の

時間に徳田秋声の「黴」を、きたならしいと言って斥けたことを憶えている。
永井荷風もまた清水先生によれば、きたならしい文学の一つであるらしかった。わたしは中学を卒業してからも数年間、徳田秋声と永井荷風の文学はきたならしいという先入観を拭い去ることができなかった。白紙に近い中学生の心に、ともかく清水先生はこのように文学の影を投じたのである。
図書室に入る生徒は少なかったので、そこへ行けばいつでも自由に本が読めた。わたしは国木田独歩の短編「武蔵野」や「源叔父」や「空知川の岸辺」や「運命論者」や自伝「欺かざるの記」を読み、夏目漱石の「坊つちやん」や「三四郎」を読み、また、そろそろ色気づいてくる年頃だったせいか、ギリシャのヴィーナス像の写真に心をときめかしたりした。しかし、図書室でじっと読書に耽っているよりは、やはり、外で野球をしたり、サッカーをして遊ぶ方が楽しかったから、文学に凝るというようなことはまったくなかった。それでもいつしか、上の学校へ行くときは、理科ではなく文科を受けることに心をきめていた。わたしの周囲には、陸軍士官学校や海軍兵学校へ行く生徒もいたけれど、将校養成の学校など、わたしにはまったく無縁の存在だった。
当時盛んになり出していたプロレタリア文学にはじめて目をひらかれたのは、中学四年のときだった。
冬休みで帰省していた郷里の町の映画館で、わたしは「何が彼女をさうさせたか」という映画をみた。この映画にわたしを連れて行ったのは、近所に住む五つ年上の学生の槇島忠三さんだった。槇島さんは実母を追い出した伯母と無理矢理に同居させられていて、家庭が面白くないため、幼い頃からいつもわたしの家にきて、兄や姉やわたしと一緒に遊んでいた。その頃、槇島さんは大阪商大の学生だったが、あの当時のことだからマルクス主義やプロレタリア文学にも心ひかれ

るものがあったにちがいない。

槇島さんは「何が彼女をさうさせたか」の原作者藤森成吉のことをわたしに説明し、映画を見終わって、わたしが衝撃を受けていることに気づくと、社会のしくみの不合理や不公正について啓蒙的な解説をした。そして、原作の小説を貸してくれた。

わたしは、映画をみた翌日から風邪で高熱を発し、寝ついてしまい、とうとう二月はじめまで寝こんだため、その年の高等学校入試に落ちてしまったけれど、槇島さんに借りた藤森成吉の小説や、またプロレタリア文学と対立する新感覚派の横光利一の「春は馬車に乗つて」や「日輪」などを、まだ結婚前の姉に枕もとで読んでもらった。そういう小説の存在を教えてくれた槇島さんは、だから少なくともわたしの文学上の師匠といっていいだろう。



藤森成吉（撮影 浜本浩）

槇島さんは、世の中の動きや、文化・芸術のことや、流行についてかなり先端的な知識をもっているようだった。プロレタリア文学と並んで新感覚派の文学にもわたしの目をひらいてくれたのは、いま考えるとちょっと面白い。

槇島さんはまた、のちにわたしが山口高校（旧制）で六カ月の停学をくい、郷里の自宅に謹慎中だったときも、大阪から、岩波の「日本資本主義発達史講座」を全巻送ってくれた。これはあるいはわたしが槇島さんにたのんで、送ってもらったのかもしれない。

いずれにしろ、槇島さんはわたしにとって得がたい指導者であって、コーラス団に入って歌を

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo